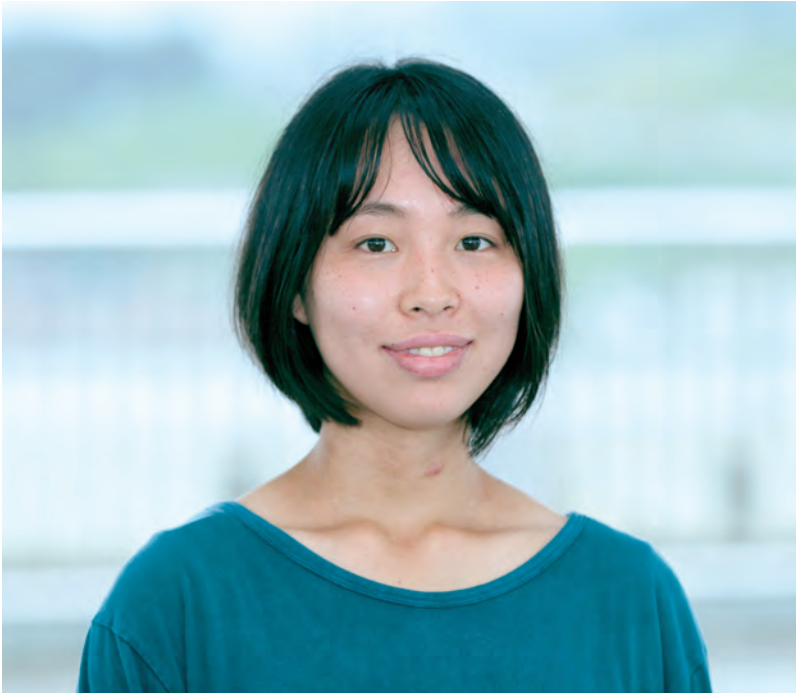


# 子どものための遊び場を作りたい



しらはた  
白幡 みゆ さん

1991年生まれ。岩手県一関市出身。ぬま大学第1期生。一般社団法人プレーパークズ／一般社団法人気仙沼あそびばーの会スタッフ。気仙沼に移住して5年が経過し、現在は、2つの遊び場の運営と個人事業「アトリエみつけ」を兼業。



私は「プレーパークけせんぬま」と「気仙沼あそびばー」の2つの遊び場の運営に携わっています。ここは、子どもが木工、焚き火、水遊びなどで自由に遊べる場所です。

2015年にボランティアをきっかけに気仙沼を訪れ、ぬま大学の受講を決めました。ぬま大学では人生の色んなことを諦める理由だったアトピーをテーマに選びました。私はストレスでアトピーが悪化することが多く、薬で治せない部分を、おしゃべりを通して改善できないかと「アトピーカフェ」というマイプランを考えました。

ぬま大学卒業後は、子どもの遊び場づくりに注力しました。活動の中で、私が幼少期から感じていた鬱屈した感情はアトピーのせいではなく、社会の大きな流れの中で生じる「子どもの生きづらさ」だと気づきました。気仙沼の子どもを見ていると、身の回りの環境で制限される、暮らさにくさを感じます。過疎化で友達の家は遠く、道路は不審者や車や熊で危ない、と普段は家の中で遊びます。出

会う大人が少なく、将来のモデルは親か先生。地域から孤立している子どもは少なくありません。しかし、どんな状況でも、子どもは「遊び」で回復する力を持っています。震災後、子どもの心の回復を目的に始まった遊び場活動は、子どもの居場所づくりに移り変わっています。

私達の遊び場には「卒業」がなく、必要としてくれる限り、赤ちゃんの時から社会に出るまで幅広い年齢の子どもが来られるのが魅力です。「大人になる準備」として未来のために時間を使うのではなく、「この瞬間が楽しいよね」と共に楽しむながら、その子の「今」を大切に作る場所です。

先日、気仙沼を離れた子が帰省した時に顔を見せてくれて、遊び場が帰ってきたい場所になっていると感じました。子どもは遊んだ時に感じる「快や不快の感情」が記憶を定着させると言われていますが、子ども時代の記憶がすっぽり抜けている若者が今、増えています。子ども時代に思いっきり遊ぶことができなかったのかもしれない。仲間

と過ごした楽しい記憶が多いほど、人生で何かがあっても、その記憶が命を支えると思います。そんな「人生の土台」を作るのが、遊び場の効果です。

子どもの遊び場活動は今後も継続していく予定です。遊び場に興味がわいた方は、ぜひ一度お越しください。また、子どもだけでなく、来ても利用できるように無料で開放しており、寄付金で運営されています。このような気仙沼の子どもの環境をより良くする活動に共感をお寄せくださる方は、ぜひご支援をよろしくお願ひします。



プレーパーク  
けせんぬま  
ホームページ



気仙沼  
あそびばー  
ホームページ